

知りたいと思うことへのいざない  
—リマでのフィールドワーク雑感—

大塚 真理子  
(姫路市スタディーサポーター)

## はじめに

筆者である私は確かに数年前あの場所を訪れていた。あの場所とは、Asociación Peruano Japonesa=ペルー日系人協会（通称 APJ、スペイン語発音でア・ペ・ホタ）<sup>1)</sup>だ。<sup>a)</sup>その建物内部には協会部署とともに図書室・史料館・劇場・日本を連想させる品物も扱う売店・日系<sup>2)</sup>金融機関・レストラン等々がある。つまり、リマの「日系社会」<sup>3)</sup>を体感できる独特の空間が広がっている場所だ。一階のレストラン「NAKACHI」には——APJ 建物内部からそのレストランに入ったついでの向こうに——日系人の方たちが集う一画もあった。彼・彼女たちはどうしているだろうか。コロナ禍の今、あの場所に集うことはできているのだろうか。博士課程前期課程で執筆した修了研究レポート<sup>4)</sup>を久々に手に取り、リマ訪問の日々を思い出すと、その懐かしさとともに、彼・彼女たちが培ってきたこれまでを知ってもらいたい。もっと知りたいと思ってもらいたい。そんな純粋な思いが沸き上がってきた。それが、私にこのエッセイを書きたいと思わせたきっかけである。

以下、リマの「日系社会」を知ってもらうために、今回は、性格を異にする現地情報媒体に掲載された三つの出来事を記す。リマの「日系社会」の枠組みは時とともに変容をとげている<sup>5)</sup>。その枠組みの境界で、あるいは、その枠組み内部でどのようなことが起こっていたのか・いるのかに着目したい。手順としては、まず、筆者が現地で見聞きしたことを記す。次に、その出来事やその出来事に対する思いが現地の情報媒体でどのように掲載されているかを紹介する。最後に、その出来事に対する筆者の雑感を述べてゆく。

## 三つの出来事

### 語られない歴史\*

「誰もシミズのこと言わない云々・・・」筆者がリマで日系人と戦前から現地に住む日本人（日系1世ともいえる）2名と話している時、この言葉は発せられた。昔、日系人が犯した殺人事件があったというのだ。調べてみると確かに事件は発生していた。

“ペルー史上最悪の殺人事件”<sup>6)</sup>

第二次世界大戦で世界中が恐怖でどん底の中、ペルー中をふるいあがらせる血塗られた歴史が刻まれた。1944年11月2日、シミズ・マモルが日本人ふた家族7名を殺したのである。警察が翌日遺体を発見した。——略——（本文スペイン語）

ペルーの有力紙 El Comercio のアーカイブに、犯人シミズとその事件の犠牲者の写真、そして、当時の記事が載っている<sup>7)</sup>。日本語新聞社が閉鎖されていた時代<sup>8)</sup>なので、在留邦人メディアが同胞の殺人事件をどのように扱ったかは検証できない。しかし、El Comercio 紙に掲載となるとペルーでは既成の事実として知られていたと想像できる。一方、これまでのところ、筆者はリマの「日系社会」が発行した資料の中にこの事件を扱ったものを確認していない。

至極当然のこととして、身内にとって不都合な情報をおおやけにはしたくない。それゆえ、身内といえる「日系社会」はこの事件を語らない。1940年のリマでの対日大暴動や第二次世界大戦で連合国側であったペルーという国家との関わりも影響したろう。それでも、なぜ、今に至るまでその歴史を語らない、残さないのだろうか。あくまで主観だが、そこには、かつて、独特の日系人イデオロギーを持つことで外部から自分たちを守った姿の残存が見えてくる。シミズの犯した犯罪は、そのイデオロギーを脅かす「日系社会」の恥なのだ。恥を見えないものにするのは、「日系社会」がペルーの生活世界の中で周縁化しないよう踏ん張った頑張り的一端だ。そのような姿が、いまだ、その「社会」の中に生き続けているのではないだろうか。

#### Okinawense<sup>9)</sup>\*\*

リマの「日系社会」では、日本にいるとき以上に沖縄を感じる機会が多い。日本文化週間が開催される時期<sup>10)</sup>、2018年には夏川りみが、2019年にはHYがライブを行っている。両者とも沖縄県出身である。夏川りみのライブでは「イヤササ」という合いの手に歓声が沸き上がり、立ち上がって彼女が歌う「安里屋ユンタ」に合わせ踊りだす観衆の姿が見られた。また、2019年、同時期に開催される「MATSURI」の県人会パレードのとりは沖縄県人会であった。その規模と湧き上がる歓声に目を見張った。

一方、2019年10月31日未明には沖縄県にとって忘れられない出来事が起こっている。首里城の焼失である。11月1日付の日系新聞「ペルー新報」には、日本語ページに琉球新報の記事が挙げられ、同時に、スペイン語ページでは12頁<sup>11)</sup>中4頁近くをさいて関連記事が掲載されていた<sup>12)</sup>。そのうち、3頁目のアンヘル・シロタ・ヒガの記事を要約する。

“首里の悲劇嘆くのではない。行動の時だ！”

我ら沖縄人のアイデンティティである首里城の悲劇は、我々の魂をも燃やした。ウチナーンチュの日<sup>12)</sup>を祝ったその日に、その悲劇は我々を襲い、人と人が作ったものの脆さを露呈したのである。——略——今こそ「ゆいまーる（助け合い）」や団結が不可欠だ。「日系社会」特に okinawense は、戦後沖縄復興のため先人たちが行ったように首里再建にむけ力を貸すべきだ。首里城は我々のアイデンティティなのだ。我々は強さをともなった謙虚さをもって、その復元に協力すべきなのである。——略——（本文スペイン語）

そこには、数度にわたり「我々のアイデンティティ」という言葉が記されている。沖縄のウチナーンチュもペルーのウチナーンチュも同じアイデンティティを保持する者なのである。今生きている場所と沖縄はつながっている。相互が同じウチナーンチュというエスニシティの成員と認め合っているといえよう。その考え方が成立するなら、理屈としては、沖縄に住むウチナーンチュとペルーに住むウチナーンチュは生活空間を異にするだけで、そこに隔たりはない<sup>13)</sup>。

一方、リマの「日系社会」における okinawense と okinawense 以外の人々の交わりに目をむけてみよう。

「我々は日本文化をペルーに伝える任務があるみたいなことを聞くと、沖縄文化を伝えるためじゃないのかなと思っちゃったりする。内地出身者は okinawense を意識しちゃうね。」

この発言は、本州出身者の両親をもつ三世の発言だ。かなり以前の数値ではあるが<sup>14)</sup>、リマの日系人のうち6割以上が片親もしくは両親の出身地を沖縄と回答している。その規模とともに、ペルーでも維持されるウチナーンチュアイデンティティの表出により、沖縄以外の出身者を一世にもつ日系人は okinawense との境界を感じているようだ。しかし、その境界上ではかならず対立が生じているわけではない。

「日本に住めと言われたら沖縄がいいわね。楽しみかたがここと似ている」

日本の本州と沖縄両方に滞在経験のある本州出身の親をもつ日系二世の発言である。両方の生活を経験した上で、住むに良しとしたのは沖縄であった。その判断の背景には、まず、リマの「日系社会」にオキナワ<sup>15)</sup>の浸透があると考えられる。「日系社会」内の okinawense とそれ以外の者との境界をオキナワが乗り越えていったといえる。上述の発言は自分が日系人として慣れているのはオキナワの生活だと言っているのだ。

もちろん、その境界を乗り越えて浸透するオキナワに常に okinawense 以外の人々が好意的であるというわけではなかろう。文脈によりオキナワに置き換えたり、融合させたり、否定したりの繰り返しが、リマの「日系社会」の内部では生じているのだろう。okinawense とそれ以外の人々の境界は、その都度、表出したり、高くなったり、低くなったり、時としては消滅したりを繰り返しているのではないだろうか。

### 古くはない Código de Valores\*\*\*

筆者が 2016 年に始めてリマを訪問した時、日系組織のあちこちで「尊敬」「正直」「義理」「連帯」「勤勉」「信用」「感謝」「根気」等の文字を見た<sup>14)</sup>。そして、当初、これらの言葉はペルーへ移民した者たちから代々受け継ぎ日系人たちが耳にしている言葉なのだと思っていた。そして、その歴史ある言葉について、ある日系人の方に同意を求めると、「いつだったかしらねえ。」と筆者が投げかけた言葉とはつじつまが合わない返事が返ってきた。

これらの言葉の総称を Código de Valores という。直訳すれば「価値コード」だ。そして、その始まりは APJ の会報誌「kaikan」で知ることができた。

#### “日系社会における道徳的 Valores”

昨年 11 月に、120 名参加のもと第 44 回代表者年度会議が開催された。そこで日系組織の根底をなす道徳的 Valores を議題とする話し合いが行われた。——略——  
(本文スペイン語・「kaikan」2006 年 3 月号 p. 8)

#### “道徳的 Valores コード”

APJ 道徳的 Valores 設定委員会——Dr. アウグスト・イワモトを長とする——での 1 年にわたる検討を経、我々日系社会構成員が寄与すべき Valores が発表された。——略—— (本文スペイン語・「kaikan」2007 年 2 月 3 月号 p. 6)

Código de Valores は 2006 年にその策定が提示され、2007 年に発表されたものだったのだ。

何をして日系人とするかはここで論じないが、2000 年代は、日系人とペルー人との婚姻も通常となって久しい<sup>16)</sup>。また、1990 年の日本の改正「出入国管理及び難民認定法」施行もその要因のひとつとなろう。「日系社会」が多様な人と接触し内包するようになっていた時、日系アイデンティティ再確認ともいえる Código de Valores が策定されたことにどんな意味があるのだろうか。多様なものを受け入れる柔軟性と日系アイデンティティを保持する保守性のバランスにより、その枠組みが変容する「日系社会」で、道標の役割を果たすようになってゆくのだろうか。これから Valores がどのようなものとして「日系社会」で存在してゆくのか注目してゆきたい。

## おわりに

このエッセイでは、結論を求めることなく雑感として筆者が現地で見聞きし調べた3つの出来事を記した。人が人と交じり合い築いてきた・築いている社会を深く各事象を検証することなく特徴づけるのはおこがましいと考えたからだ。レストラン「NAKACHI」に集っていた方たちもふくめ、リマで生活する日系人やその日系人と関わったすべての者たちの生きざまが交錯し、今の「日系社会」は築き上げられたのである。これからも、多様性に富む者たちとの交錯から、その「社会」は変容してゆくのであろう。完成がないその変容過程には多文化共生へのヒントが潜んでいるかもしれない。そのヒントを探し当てるには、まずは知ること、知りたいと思うことが不可欠である。思い込みからは新たな知見は生まれない。些細なことから歴史的イベントの証言まで、ひとりひとりの人生の語りを丁寧にきくことで新たな視野が広がる。リマでの日々が私にそれを教えてくれた。このエッセイを読んで、少しでもリマの「日系社会」をもっと知りたいと思ってもらえたら本望である。

「また来るね」と言って別れたままになっているあの場所に私はいつ戻れるのだろうか。建て替えた後の APJ<sup>17)</sup> にもあの独特の空間は引き継がれるのだろうか。再訪できる日を楽しみにしたい。

注：

- 1) APJ は団体名称である。本来はこの建物を指す Centro Cultural Peruano Japonés（日秘文化会館：通称「kaikan」）を使用すべきだが、kaikan と同義で APJ が使われることもある。つまり「kaikan で会う」＝「APJ で会う」ということだ。筆者もこの建物を APJ と言っていたことが多いので、本稿では APJ を採用する。
- 2) この日系は、日本の資本という意味ではなく、日系人のという意味である。
- 3) ペルー社会の中にある枠組み不確定な社会であるので、本稿では常に「」付きで使用する。
- 4) 神戸大学国際文化学研究所 2020 年 9 月修了：レポートタイトル「デカセギ 2 世ペルー人青年のアイデンティティ」（未発表）
- 5) 戦前は在留邦人のコミュニティであったが、戦後、ペルー人との婚姻が増えるようになった。また、1990 年の日本の「出入国管理及び難民認定法」の改正で、日系人の配偶者やその未成年の連れ子も在留資格「定住者」が獲得できるようになった。「日系社会」内部は多様化し、その社会と外部の境界線は条件により変化するといえる。
- 6) Comercio, archivoel Comercio  
<https://elcomercio.pe/archivo-elcomercio/mamoru-shimizu-el-primer-asesino-en-serie-del-peru-noticia/>（最終閲覧：2022/06/09）
- 7) “La medianoche del japonés” という本事件を扱った書籍も 1991 年にペルーで出版されている。
- 8) 1941 年日本語新聞社は閉鎖。1950 年に「秘露新報」創刊されるまで日本語新聞の空白期間が

ある。

- 9) ペルー日系人のうち沖縄出身者を一世に持つ者
- 10) 2019年は11月3日から9日
- 11) 「ペルー新報」(スペイン語表記 PerúShimpo) 日本の新聞と同じく右開きで一面から日本語表記ページが始まり、左開き一面からスペイン語表記ページとなっている。
- 12) 10月30日がウチナーンチュの日である。それを祝ったその晩、正確には10月31日未明に火災が発生した。
- 13) 有末(1997)ではエスニシティが国家を超えてゆく場合の形態のひとつとして沖縄系を例に挙げている。  
有末賢, 1997「日本出稼ぎとエスニシティ変容」柳田利夫編著『リマの日系人ペルーにおける日系社会の多角的分析』明石書店, 131-159
- 14) 柳田(1997)では、1995年調査データから両親(一世)の出生地として父親91名中58名63.7%、母親65名中43人66.2%が沖縄と回答と報告している。  
柳田利夫, 1997「付録1995年リマ日系社会総合調査アンケート集計表」『リマの日系人ペルーにおける日系社会の多角的分析』明石書店, 353
- 15) 本稿では、ペルーで見聞きする沖縄的と思われるものを意識しオキナワとカタカナ表記にした。
- 16) 井沢他(1969)では、戦前のリマの邦人コミュニティに同族的規律が存在していたと記している。一方、柳田(1997)の1995年調査では、127組中48組の夫婦がどちらかが非日系人であったと報告されている。  
井沢実他, 1969『ペルー国における日本人移民史』日本人ペルー移住史編纂委員会, 215-216  
柳田利夫, 1997「日系人から los Nikkei へ」『リマの日系人ペルーにおける日系社会の多角的分析』明石書店, 284
- 17) 2022年6月現在、まだ建て替えは始まってないと現地知人に確認済みであるが、APJが入っている kaikan は、建て替えが予定されている。

\*参考：大塚真理子(2020)『デカセギ2世ペルー人青年のアイデンティティ』(未発表)

神戸大学国際文化研究科博士課程前期課程 2020年7月提出, 99-102

\*\*参考：同上 96-99

本稿筆者は修了研究レポートで、リマのオキナワについて考察したが、飯塚(2021)では、沖縄県に住む人々や行政側からの視点で沖縄にルーツを持つ移民との関わり方が記されていた。その内容は大変興味深く、かつ、知見に満ちるものであった。  
飯塚陽美(2021)「日本人の中南米移住に関する歴史継承と多文化共生——沖縄県における移民の歴史啓発事業を事例に——」第2回 JICA 海外移住「論文」および「エッセイ・評論」投稿

\*\*\*参考：大塚真理子(2020)『デカセギ2世ペルー人青年のアイデンティティ』112-114

注) に記載したほかの参考資料

「ペルー新報」2019年11月1日号

「kaikan」2006年3月号, p. 8

「kaikan」2007年2月3月号, p. 6

尚、文中翻訳部は筆者が訳したものを使用している。

参考写真

a) APJ 全景 (2018年11月13日筆者撮影)



b) El Comercio アーカイブ記事より犯人シミズと犠牲者の写真



c) 「ペルー新報 PerúShimpo」2019年11月1日号に載った首里城火災の記事



d) リマ市内「ラ・ウニオン運動場協会 AELU」内の Código (2016年8月26日筆者撮影)

